台大日本語文研究第 25 期
2013 年 6 月、頁 107-140
2012-10-22 收稿、2012-12-21 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.2013.25.107

中日兩國語言方位詞「西～」之認知多義構造

蔡豐琪*

摘要

日語方位詞「西」與其他語彙複合、像「西口」、「西日本」是表達「方位」或者「位置」等基本語義之外、受到人們的生活體驗以及各國不同的語言文化、宗教思想等的影響之下、產生像「西暦」、「西方浄土」和「東西東西」等許多衍生用法。也就是方位詞「西」形成了所謂「多義表現（polysemy。国広 1994：22-44）」。這些表現之間究竟有何語義關係？基本義是如何地延伸出許多衍生義等問題、成爲本論文探討的重點。

本論文是以認知語義學的觀點、來分析中日兩國語言方位詞「西」的多義構造。研究方法如下：(1)首先從兩國語言的辭典與語料庫中收集語料。然後(2)對方位詞「西」的所有衍生用法進行分類檢討、以確定實際共時狀態下之使用分布及語義範疇。接著(3)對方位詞「西」的各項用法進行比較、也參考語源辞典之解釈、以歸納確定「西」之最核心基本義的語義。之後(4)分析基本義與衍生義之間語義關係是否具有「類似性」、「隣接性」、「包摂性」等特性、並且以「隱喻、換喻、提喻」等譬喻的概念、來解釋基本義與衍生義之間的語義延伸。最後(5)用多義語義網絡圖來整理方位語「西」的

* 銘傳大學應日系助理教授

多義構造、針對方位語「西」的基本義和衍生性之間的語義關係進行解釋、以提供日語教學與學習的參考。

關鍵詞：多義表現、語義延伸、隱喻、換喻、語義網絡圖

Analytic Comparisons between "West" as a Noun of Locality in Japanese and Chinese: Polysemy of "nisi" in Japanese and "xi" in Chinese

Tsai, Fong-chi*

Abstract

This paper tried to analyze the polysemy structure of "west" as a noun of locality, which is interpreted as "nisi" in Japanese and "xi" in Chinese from perspective of cognitive semantics. Research methods this paper adopted were as the followings: (1) Collecting texts from dictionaries and text corpora of Japanese and Chinese. (2) Sorting out derivations of "west" as a noun of locality in order to understand its usage coverage and semantic range in synchronic reality. (3) Comparing fundamental usages of "west" as a noun of locality, as well as generalizing its fundamental semantic features referring to explanations from etymology dictionary. (4) Analyzing fundamental meaning and derivative meaning not only to testify features i.e. similarity, proximity, or hyponymy, but also define the semantic extensions in-between, regarding concepts of cognitive metaphor, such as metaphor, metonymy, and synecdoche. (5) Summarizing polysemy structure of "west" as a noun of locality based on semantic network so that clarifications are made between its fundamental meaning and derivation semantic interaction which can be used as future references for teaching and learning Japanese.

Keywords: metaphor, metonymy, polysemy, semantic extension, semantic network

* Assistant Professor, Department of Applied Japanese, MCU

日中両言語における方位語「西～」の認知的多義構造

蔡豐琪*

要旨

日本語の方位語「西」は、他の語彙と複合して、「西口」、「西日本」のような「方位」や「位置」を表す基本的な意味のほかに、人間の身体的な体験、及び伝統的な社会文化に影響され、「西暦」、「西方浄土」や「東西東西」などの派生的意味が多く生じる。即ち、方位語「西」がいわゆる「多義表現（polysemy）」（国広 1994）になる。これらの表現の間にどのような意味関係が存在するのか、どのように意味拡張するのかを究明するのが本研究の目的である。

本論は認知意味論の観点から、日中両言語の方位語「西」の多義構造を中心に分析する。研究方法としては、まず「西」の派生義に対する分類を検討するため、日中両言語の各辞典や文献で取り上げた用例を主な語例資料として収集する。それから「西」の用例を比較しながら、実際の共時的な使用分布とその意味範疇を観察する。従って、各辞典の「西」の意味項目を比較して、語源辞典の解釈も参考にしながら、基本義の核心的な意味を確認する。続いて、「類似性」、「隣接性」、「包摂性」などの特徴で、基本義と派生義との間の認知的な意味関係を分析しながら、「メタファー、メトニミー、シネクドキーなどによる意味拡張」という概念で、基本義と派生義の認知的意味関係を解釈する。最後に「西」の多義構造を意味ネットワーク図にまとめる。ネットワーク図で「西」

* 銘傳大学応用日本語文学科助理教授

の基本義と派生義との意味関係を解釈でき、日本語教育上応用が可能になると考えられる。

キーワード：多義表現、意味拡張、メタファー、メトニミー、ネットワーク図

日中両言語における方位語「西～」の認知的多義構造

蔡豐琪

一、研究範囲と研究方法

国立国語研究所編纂の『辞書を知る』(井上他編 2009) では様々な種類の辞書が紹介されている。これらの辞書は、それぞれ異なる目的によって編纂されたものなので、目的に相応しい辞書を選択することが調べ物をする際のカギとなる。同様に、日本語学習者については、学習の便宜を考えたより良い学習用辞書の編纂が重要な課題であると考えられる。

しかし、台湾の日本語学習者においては、しばしば『国語辞典』、又は国語辞典を基に中国語訳を付けただけの『日華辞典』を使用しているのが現実である。

本論で取り上げる「西（にし)」について、例として中型国語辞典である『大辞林』(松村明他 2006：1919) をひもとくと、用法解釈の項目数は 7 項目あり、「①方位の一。太陽の沈む方角。十二支を配するときは酉（とり）の方位。⇔東②西から吹く風。③〔仏〕（ア）西方浄土。（イ）「西本願寺」の略。お西。④劇場で、江戸では舞台に向かって左側、京坂では右側をいう。⑤相撲で、番付上で左側に記されている方。東より格は下とされる。⑥資本主義国家。西ヨーロッパに多いことからいう。→西側⑦江戸新宿の遊里。江戸城の西にあったのでいう。) といった説明が出ている。このように、国語辞典では通常、解釈が羅列されているだけで、各用法の間の意味的な繋がりは説明されていない。特に日本語学習者の場合、各用法を意味や用法の間の繋がりを通して、全体的に把握することが望ましいと思われるが、そうなると、辞書の編纂には日本語を母語としない者のために、用法の意味的な関連性についての整理にある種の工夫が必要となる。

一方、『辞書を知る』(2009) などの紹介によると、それぞれの

語彙の各用法についての意味的な繋がりを考慮し、認知意味論の「多義ネットワーク図」、「イメージスキーマ」などの概念を導入して編纂された英和辞典（田中茂範他（2006）『Ｅゲイト英和辞典』、竹林滋他（2007）『ライトハウス英和辞典〈第 5 版〉』、瀬戸賢一（編）（2007）『英語多義ネットワーク辞典』）が近年出ているという。そして、「多義ネットワーク図」を導入した中国語辞典（李行健（2004）『現代漢語規範辞典』）も出て来た。

特に日本語教育の観点で語彙の各用法についての意味的な繋がりを考慮し、認知意味論の「多義ネットワーク図」、「イメージスキーマ」などの概念を辞典に導入し、学習者に語彙の多義構造を紹介する日本語学習辞典（図 1 の森山新ら（2011）『日本語多義語学習辞典』）が最近出版されるようになった。

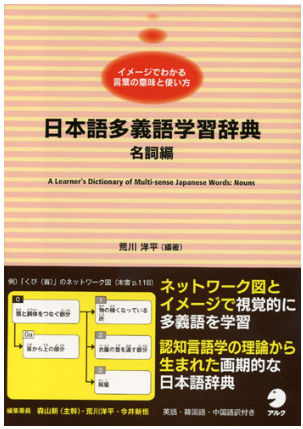


図 1　日本語教育の観点で認知意味論の「多義ネットワーク図」、「イメージスキーマ」などの概念を辞典に導入し、学習者に語彙の多義構造を紹介する日本語学習辞典

「多義ネットワーク図」、「イメージスキーマ」などの概念を導入した辞典を紹介すると、例えば、図 2 は瀬戸賢一（編）（2007）『英語多義ネットワーク辞典』の語彙「right」に対する用法の解釈である。「メタファー」、「メトニミー」、「シネクドキー」の認知

的な比喩で「right」の意味拡張の類型を分析し、語彙「right」の語史をも参考しながら、その各用法の意味的な繋がりを解釈している。最後に枝分かれ図の形で「right」の多義構造を「多義ネットワーク図」で表現してまとめている[1]。

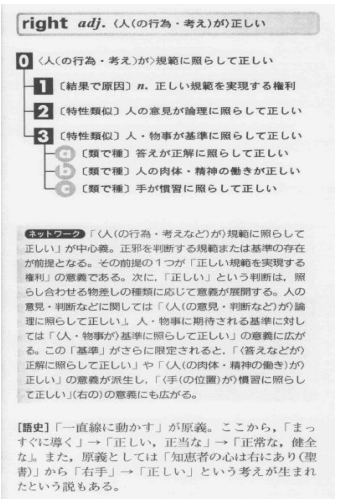


図２　語彙「right」の用法解釈。認知的な比喩で意味拡張の類型を分析し、その各用法の意味的な繋がりを解釈し、最後に「多義ネットワーク図」でまとめる。（瀬戸（2007）より引用）

我々は図２の英語語彙「right」に対する一般的な理解では、「右方、右側」や「正しい」などの意味をまず挙げられるが、どれが基本的な意味であるのか、どれが基本義から派生された意味であるのかはこの語彙の語史を調べれば参考になる。即ち、語彙の語源分析を参考することは、どれが基本的な意味であるのかを確認

[1] ただし、認知意味論の概念を導入して編纂された英和辞典だとは言うものの、上述文献では「多義ネットワーク図」、「イメージスキーマ」などでまとめられているのは部分的な語彙にとどまっているのが現状である。例えば、本論で検討する「西」ではどの英和辞典でも「多義ネットワーク図」、「イメージスキーマ」などが用いられていないので、多く補充する必要があると思われる。同じように、森山新ら（2011）『日本語多義語学習辞典』で紹介された語彙は限られた常用語彙であり、方位語「西」は紹介されなかったので、全面的に語彙の多義構造を紹介したとは言えない。

することに対して有利な手掛かりです。図２が示すように、瀬戸賢一（編）(2007)『英語多義ネットワーク辞典』では語彙「right」の語史を参考して、「right」の原義が「一直線に動かす」であり、その原義から「まっすぐに導く」、「人の行為･考えが規範に照らして正しい」などの意味を派生した。その「人の行為･考えが規範に照らして正しい」意味からさらに「手の位置が慣習に照らして正しい」の派生意味に広がる。

『英語多義ネットワーク辞典』の多義ネットワークのように、認知意味論の観点からある語彙の各用法の意味的な繋がりに注目し、語源の意味を参考しながら、認知的な比喩でその各用法の意味拡張を解釈して、「多義ネットワーク図」で各用法の意味的な繋がりをまとめて表現することによって、日本語学習者には、語彙の各用法を全体的に捉えるものとして提供できる、一つのいい方法であると思われる[2]。

語彙は言語体系の基礎であり、語彙の用法や意味解釈を含めて、日本語の語彙体系をいかにして有効に系統付けるかは日本語教育の重要な一環である。例えば、「方角」、「方位」を表す「西」は、我々の日常生活にごく自然に入り込んでいる基本的語彙であり、他の語彙と複合して「西口」、「西日本」のような「方位」や「位置」を表す基本的な意味のほかに、人間の身体的な体験から得た認知的な概念、及び伝統的な社会文化に影響され、「西暦」、「西方浄土」や「東西東西」などのように、単に「方位」、「位置」という意味ではうまく解釈できないような派生的意味が多く生じる。即ち、方位語「西」はいわゆる「多義表現（polysemy）」（国広 1994）となる。これらの表現の間にどのような意味関係が存在するのか、

[2] 鷲見（2010）が指摘しているように、学習初期に提示され、使用頻度も高いために、一見習得が容易に思える基本語であっても、語彙指導においては、意味的に関連する類義語との意味境界や多義的拡張の転用のプロセスにも目を向けた指導の必要性がある。つまり、（１）多義語の意味習得は語彙習得における難しい点の一つである。（２）語を多義的な意味構造を持つカテゴリーとして習得していくための支援が必要である。それ故、日本語教育においては語彙の各意味の間の関係についての習得が重要な課題の一つであると考えられる。

どのような意味拡張が行われているのかを究明するのが本研究の目的である。

本論は認知意味論の観点に基づき、日中両語の方位語「西」の多義構造を中心に分析する。研究方法としては、まず方位語「西」の派生義に対する分類を検討するため、日中両語の各辞典や文献で取り上げられている用例を主な語例資料として収集する。さらに、コーパスを利用して、現在使用されている実例を補足して分析する[3]。そののち、方位語「西」の用例を比較しながら、実際の共時的な使用分布とその意味範疇について観察する。このため、各辞典に掲載されている方位語「西」の各意味項目を比較し、さらに語源辞典の解釈も参考にしながら、基本義の核心的な意味を確認する。続いて、基本義と派生義との間の認知的な意味関係を分析し、その認知的な意味関係の特徴（例えば、「類似性」、「隣接性」、「包摂性」）を見出し、「派生義がメタファー、メトニミー、シネクドキーなどの認知的な比喩による意味の拡張」という意味拡張の類型[4]で、基本義と派生義の認知的な意味関係を解釈する。最後に方位語「西」の多義構造を多義ネットワーク図によってまとめ、方位語「西」の多義構造を説明する。多義ネットワーク図で方位語「西」の基本義と派生義との意味関係を解釈することで、日本語教育にも応用ができると考えられる。

---

[3] 用例の出所については、コーパスより選んだものについては出典を明示するが、辞典の用例は日常的表現の場合は特に示さない。用例を取り上げて分析する際には、中国語の用例は〈 〉で、日本語の用例は「 」で表示する。

[4] 本論は瀬戸（2007）の分類に従い、認知的な比喩を「メタファー、メトニミー、シネクドキー」による三分法によって分類し、意味拡張のプロセスを解釈することとする。それぞれの比喩についての定義は籾山（2002）と瀬戸（2005）の、以下のものに従う。（１）メタファーは二つの事物・概念の何らかの類似性（similarity）に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩である（籾山 2002: p.65）；（２）メトニミーは二つの事物の外界における隣接性（contiguity）、さらに広く二つの事物・概念の思考内・概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩である（籾山 2002：p.76）；（３）シネクドキーは、より大きなカテゴリー（類）とより小さなカテゴリー（種）との間の包摂関係（hyponymy）に基づく意味的伸縮現象である（瀬戸 2005：p.129）。

二、「西」についての先行研究

従来の研究成果を踏まえた分析とするため、認知意味論の観点で「西」の多義表現を検討する先行研究を渉猟し、分析した。認知意味論に基づいて「西」の多義表現を検討した日本語文献は見当たらないが、対照言語学の観点で分析した水野（1978）と異文化理解の観点で検討した恵（2006）がある。一方、同様に認知意味論の観点で方位語の多義表現を検討する中国語文献があるものの[5]、中国語〈西〉について認知意味論に基づき検討された中国語文献も特に見られない。しかし、対照言語学の観点から日中両語の「西」の意味を比較対照する文献は范梅（2005）、王克升（1994）、劉旭寶·程放明（2002）などがある。また中国語の〈西〉の意味を分析する文献としても靳雅姝（2003）、陶氏河寧（2006）、李欣（1998）、曾石飛（2010）などがあり、大いに参考になる。しかし、中国語文献は紙幅がおおよそ 5 ページ以下の短い論考であり、「西」の部分的な意味の概論にとどまる論文が多く、「西」の多義表現を全面的に見渡した文献は少ない。次に、これまでの研究の状況を把握するために、方位語「西」について検討した先行研究をいくつか紹介する。

まず、水野義明（1978）の「『東西南北』－方位語の基準について－」は今回渉猟した文献の中で最も古いものであり、各言語の辞典から世界の主要な言語の方位語「東西南北」の語彙を収集、意味を比較対照し、汎言語的な共通点を検討したものである。この検討の結果によると、方位語の大部分は「一日の一定時間の太陽の位置」や「日の出に向かっているときの位置関係」に基いているものであるという。例えば、「東」は「日の出、夜明け、朝」に、「西」は「日没、夕方」に、「南」は「真昼」に由来し、一方「東、西、南、北」はそれぞれ「前、後、右、左」と同義であると述べた。水野（1978）

[5] 例えば、王運旋（2011）『從認知角度看中日方位的“左”“右”』西南大学修士論文、宮雪（2009）『漢日方位詞比較研究－以“上”“下”為中心－』大連海事大学修士論文、陶魏青（2007）『日語方位詞多義的認知考察－以“前·後”為中心－』廣東外語外貿大學修士論文、などの論文がある。

の分析により、太陽は方位の直接的基準であり、方位「西」は太陽が沈む方角に深く関わっているといったことが明らかになった。なお、水野（1978）は「東、西、南、北」などの方位を表す語彙のカテゴリーを「方位語」と名付けており、本論もこれに従って、「方位語」と呼称する。

次に、范梅（2005）の『關於現代日語中的“方位詞”－兼與漢語方位詞的比較－』は、日本語の「方位表現」を網羅的にまとめた修士論文である。あらゆる方位を表す日本語の「方位表現」の使用分布や「方位表現」の語構成を概観的に理解することができるが、研究範囲が広すぎて、方位語「西」の各用法についての意味的な繋がりが分析されていない。また、中国語では方位·位置を表す語彙のカテゴリーを〈方位詞〉あるいは〈方所詞〉と称し、これが范梅の論文タイトルにも用いられているが、日本語では方位·位置を表す語彙は名詞のカテゴリーに属しており、特別な品詞分類の用語は使われていない。日中両語を比較対照するため、本論では上記水野（1978）の用語に従い、一律に「方位語」と称する。

続いて、恵玲子（2006）の「日本語と英語における空間語彙「東・西・南・北」に関する一考察－日・豪の語彙イメージ調査より－」を紹介する。この論文は直接方位語「西」の各用法の使用分布や各用法の意味的な繋がりそのものについて分析したものではない。しかし、10代後半の日本人学生とオーストラリアの一般市民に対して、空間語彙として「東・西・南・北」を提示し、これをどのように認識しているかといったアンケート調査を実施しており、結果についていくらかの分析がなされている。これによると、世界的に、自然現象もしくは太陽信仰などから「東・西・南・北」の語彙が生まれており、人間の認識上の差はないものの、南北両半球にある環境の差や文化圏の違いにより、多少の違いが見受けられたという。特に注意すべきことに、日本人学生の間では「西」に対するイメージや連想語として「西風」、「白」といったものが

取り上げられた。これらは上位にこそ出現しなかったが、日本の文化や社会を反映する語彙である。「西」に対する「西風」、「白」のイメージや連想語は中国陰陽五行説の「秋」に関わり、恵（2006）の解釈では、陰陽五行説などの中国思想の影響を受けた「東・西・南・北」に対するイメージが日本文化の根底のところで息づいているということが伺えるという。おそらく中国文化の影響はほとんど気が付かれないほど日本文化に溶け込んでいるのであろう。

最後に、靳雅姝（2003）の『"東西南北"與方位文化』は言語文化の観点から方位語と中国語文化との繋がりを検討する中国の修士論文であり、方位語「東西南北」の言語使用に見られる中国語の文化や思想について独自の視点で解釈している。結論としては、方位語「西」の言語使用は太陽崇拝から由来した「東尊西卑」や陰陽五行説に強く影響されているとしており、筆者が「西」の各用法の意味的な繋がりについて考察を進めていく上で、この論文から得た文化的な観点は示唆的である。

以上のように、方位語「西」の表現について検討した先行研究の数は少なくないものの、認知意味論的なの観点で日中両語の「西」に見られる多義表現を比較対照した研究は特に見られないようである。それらの大多数は方位語の使用分布を概観的に紹介するもの、もしくは方位語「西」の使用分布について検討を試みてはいるが、限られた用法のみについての言及にとどまっているものである。さらに、語例の収集及び分析に不十分なところがあるように思う。筆者の考えでは、コーパスの語例[6]を活かして、辞書に収集されなかった近年使用した実例の用法も補足して、「西」のあらゆる多義用法を検討することによって、更なる成果を期待することができるのではないかと思う。このような考えから、以下では本論独自の方法で分析した基本義と派生義との認知的な意

[6] 今回使用したゴーパスは参考文献の最後に掲載された用例採集資料のように、中国語の「現代漢語平衡語料庫」と日本語の「現代日本書き言葉均衡コーパス少納言」を使った。その他に、「読売新聞ヨミダス歴史館記事バンク」や「中時電子報」、「聯合知識庫」などの記事バンクをも参考した。

味関係を従来の分析と比較しつつ、意味拡張のプロセスを検証する。

三、「西～」の意味拡張

本節では、方位語「西～」の語例を分析し、「西」の基本義及び意味拡張によって派生された「西～」の派生義について検討する。

（一）「西」の基本義

一般的に、辞典では語彙項目に対する意味や用法の第一義に配列されたものは使用頻度が高く、また最も基本的な意味項目であることが多い。ただし、それらは必ずしも最も基本的な意味を表す基本義であるとは限らない。それゆえ、本論では「西」の語源をも参考しながら、複数以上の辞典の第一義を対照比較し、基本義の基本的な意味を確認する。周知のように認知言語学者の間でも、「基本義」に対する見解はそれぞれ異なっている。皆島（2009）の「基本義」に対する定義を参考にして、次のように定義しようと思う。即ち、原義も踏まえながら各語義をカバーするような最も基本的な意味であり、語義展開の起点となるものを「基本義」と称する。例えば、図２が示したように、提示した「right」のさまざまな意味は無秩序に派生してきたのではなく、基本義を起点として、認知的な比喩により意味的な繋がりのある派生義を生み、ネットワークを構成するのである。逆に言うと、「基本義」は語義展開の起点であり、原義も踏まえながら各語義をカバーするような最も基本的な意味である。

この基本義を求めるため、複数の辞典を使って、各辞典の第一義を観察する。また、語源に遡って本来の意味（本論では「原義」と呼ぶ。基本義とは異なる場合もある）を観察することは、基本義の意味を検証する方法として有効であると思われるので、語源辞典の解釈も参考にして検討する。ただし、共時的な使用分布とその意味範疇を観察する目的から、古例やそれに対する用法解釈は本論の対象外とする。

「西」の基本義を分析するために、まず日中両語の辞典を６冊選び、各辞典の「西」についての用法解釈の第一義をまとめたところ、表１のようになった。なお、日本語の「西」には「にし」、「さい」、「せい」の三つの読みが存在するが[7]、それぞれについての意味項目を全て調査した。中国語の『漢語大辭典』、『辭海』、『現代漢語規範辭典』の〈西〉の第一義には、表１で示したように「方位詞。日落的方向、西方、與東相對」という解釈が置かれている。一方『日本国語大辞典』、『大辞林』、『学研国語大辞典』では「西」の第一義の解釈は、「方角の名。日の沈む方向。十二支を配するときは酉の方角」であり、「位置」を含まなかった。

以上の観察によれば、日本語・中国語ともに「方角の名。日の沈む方向」という「西」の用法が基本であることが分かった。

表１　方位語「西」に対する各辞典の用法解釈の第一義

	第一義と意味解釈の項目数
日本国語大辞典	**さい【西】**にし。東の対。**せい【西】**にしの方角。**にし【西】**①方角の名。日の沈む方向。十二支では酉（とり）の方角にあてる。（北原保雄他 2001：第 5 巻 1245、第 7 巻 1126、第 10 巻 421）
大辞林	**さい【西】**せい。**せい【西】**にし。**にし【西】**①方位の一つ。太陽の沈む方角。十二支を配するときは酉の方角（松村明他 2006：972、1366、1918）
学研国語大辞典	**さい【西】**×。**せい【西】**にし。西の方角。**にし【西】**１方位の一つ。太陽の沈む方角。略記号 W。（金田一春彦他 1989：731、1042、1476）
漢語大辞典	**【西】❶**方位詞。日落的方向、西方。（羅竹風等 1997：735）

[7] 厳密に言えば、表記が同じであっても、語形（音形）が違う場合は異なる語と見なすのが一般であるが、各辞典の「西」に対する第一義を観察すると、「にし」、「さい」、「せい」の三つの語形の基本義や語源の意味には差異が見られないので、本論では全て調査対象とし、「西」のあらゆる意味を検討する。

辞海	**【西】❶**太陽沒落的方向。（邊春光等 2002：1809）
現代漢語規範辭典	**【西】❶**四個基本方向之一、太陽落下的一邊（與“東”相對）（李行健 2004：1387）

続いて、「西」の基本的な意味について、その由来に遡って理解するために、漢字〈西〉の原義（語源）を見ると、後漢・許慎による『説文解字』には字形〈西〉について〈鳥在巣上。象形。日在西方而鳥棲、故因以為東西之西（夕日に鳥が休む状態から、日が沈む時の方位を表す)〉との説明があり、字形の解釈である「夕日に鳥が休む状態」からは「太陽が沈む時の方位」が連想される[8]。これに対して、前田（2005)『日本語源大辞典』には日本語「にし」に関して、「**❶日のイニシ（往）方の義**〈和句解。日本釈明など〉。**❷日没する意味のヒネシの転**〈東雅。蒼梧随筆〉。**❸ニシ（日沈）の義**〈和語私臆鈔〉。**❹ヒシリ（日後）の義**〈言元梯〉」などの説（前田 2005：861）が挙げられている。

以上の語源説を見ると、漢字〈西〉の語源も日本語の「にし」の語源も「太陽の沈む時の方位」に深くかかわっていることから、「西」の基本義は本来「太陽の沈む方向」を指すと分かった。即ち、例（１）の「西」、例（２）の〈西〉の用法は、本来「太陽の沈んでいく方向」を指す基本義に由来するものである。

（１）日本語：西方。西征。西進。西光。

（２）中国語：西方。征西。西伐。西進。西照。夕陽西下。

（二）複合語をなす「西～」の意味拡張

方位語「西」が他の語彙と合成されて複合語になるとともに、方向を表す「西」の基本義からも多くの派生的な意味が生じた[9]。本節では、複合語「西～」の語例を分析して、「西～」の派生義に

[8] 李（2008：959)『文白對照說文解字字源增補版』より引用。

[9] 複合語とは、例えば『日本国語大辞典』によれば、「本来それぞれ独立の言語要素が、二つ以上結合して、新たに単純な一語としての意味・機能をもつようになったもの。『やまがわ（山川)』『ゆうやけ（夕焼)』『とおあさ（遠浅)』『はやおきどり（早起鳥)』『おちつきはらう（落着払)』など」。（北原保雄他 2001：第 11 巻 p.767）

ついて検討する。

1、「位置」を表す「西～」の派生義

ある場所を指示するときは、その場所の方向をまず提示することが多い。言語の長い年月の使用に伴い、もともと方向や方角を指す「西」の意味も「太陽が昇る方向－その方向を用いて指される場所」という隣接性によるメトニミーで、基本義の「方向」から「位置」の用法へと意味拡張され、太陽が昇る方向である「方向認識」からその方向を用いて指される場所という「空間認識」に関する概念へと派生された転義であると考えられる。即ち、「西方－その西方という語を用いて指されるある地域」という、隣接性によるメトニミーの意味関係が見られる。

「方向認識」からその方向で指される場所である「空間認識」の概念への派生は、日常生活では珍しい意味拡張ではない。谷口（2006：43）が取り上げた「circle」の多義性を例として説明すると、線を引いて描かれた「円形」が「circle」の最も基本的な意味であると考えられるが、「円形のもの、円形広場」の意味は図形の「円」をより具体化しており、円形をした特定のモノや場所を指している[10]。即ち、「方向認識」からその方向で指される場所という「空間認識」の概念への拡張が、認知的比喩による意味拡張の一つであると窺える。

注意すべきは、「位置」の用法は参照点と標示する特定地域との相対関係によりその特定地域を指すものであり、違う参照点をとれば、同じ方位語「西～」を使った表現でも、指す地域はそれぞれ異なってくる場合がある。例えば、日本語の「西洋」（例３）も中国語の〈西洋〉（例４）も、いわゆる東洋諸国である中国や日本を参照点として欧米諸国を指して表現するもので、指す地域は同じである。一方、日本語の「西欧」（例５）の場合、もし東洋を参

[10] 黄居仁（2009：p.218）も中国語〈圈子〉の用例を取り上げて、「輪郭」から「区域」への意味拡張を説明した。例えば、〈圍成一個圈子跳舞〉は輪郭を表す用法であり、区域を表す用法〈站在圈子內、不可以跑出來〉は輪郭を表す用法から意味拡張された派生義である。

照点とすれば、ウラル山脈以西の「ヨーロッパ全体」を指すが、東欧を参照点とすれば、同じ「西欧」という語が、早くから近代民主政治が発展し比較的経済水準が高いイギリス・フランス・オランダなどの「ヨーロッパの西部の地域」をいう場合もある[11]。即ち、中国語と日本語の間で参照点の選択が違えば、同じ方位語「西～」を使った表現でも、指す地域はそれぞれ異なってくる場合がある。例（５）の「西国三十三所」は関西以西の諸国である畿内とその周辺を中心とする三十三か所の観音巡礼の霊場を指す意味である。

（３）日本語：西洋。西半球。西亜。

（４）中国語：西洋。西半球。西亞。

（５）日本語：西欧。西口。関西地方。西国。西浄。西本願寺。
西国三十三所。

（６）中国語：西歐。西口。西南地區。西藏。西山。西湖。西郊。

以上見てきた用例によっても示されたように、方位語「西」が太陽を基準とする方位把握によって「方向」から「位置」を表す派生義へと意味拡張されたのは、日中両語共通の現象である。

なお日本語では地理や気象を表現するものとして、気象情報が図３で示した「16 方位」のように、「北西、南西」などの気象用語が常用され[12]（例７）、「南－北」方位軸を基準として表現されている。「東－西」方位軸を基準とする中国語とは異なっているが、最近台湾の気象情報では、〈南南西〉、〈北北西〉などの「南－北」方位軸を基準とした気象用語もだんだん使用されるようになっている[13]。

---

[11] 参照点の選択によって指す地域がそれぞれ異なってくるのは、「捉え方（construal）」の問題であると考えられる。籾山（2010：27）は「同じものの位置を異なる視点から捉えることができる」と説明している。

[12] 日本語版 Wikipedia によると、南西は「西南（せいなん）ともいう。南と西の中間で、方位角は 225°である。南北を先にする表し方は西洋からの習慣であり、東西を先にする表し方は中国からの習慣である。」（Wikipedia: http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%8D%97%E8%A5%BF より引用）。

[13] 例えば、中時電子報（20110829）:「南瑪都颱風清晨登陸台灣陸地後、由於結構遭到破壞、在早上八點減弱為輕度颱風仍以每小時九公里的速度、**向北**

（７）日本語：北西高校。南西諸島。(*西南戦争)。

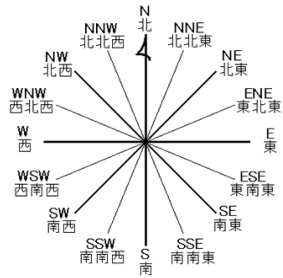


図３　16 方位図

2、「伝来元の文化地域」を表す「西～」の派生義

また、時代の推移により、漢民族と周辺民族との往来、文化交流が重なり、海外から品物や制度などが多く伝来するようになった。そこで西方から伝わってきたものを「西～」で表現する。即ち、「西～」は「西の文化地域にある～」または「西の文化地域にいる～」の意味を表し、抽象化された「範囲」を表現する用法である。黄居仁（2009：218）の論文から中国語〈圏子〉の用例を引用すると、例（８）の〈華人圏子〉も抽象化された「中国移民の文化活動範囲」を表現する用法であり、本節で検討する「伝来元の文化地域」を表す「西～」の派生義に似ていると考えられる。

（８）中国語：她在美國的華人圈子很有名。

この派生義は「場所－その場所で生じるもの」という隣接性によるメトニミーで、「場所」から「その場所で生じるもの」の用法へと意味拡張され派生された転義であると考えられる。即ち、「西方の文化地域－その西方の文化地域から生じて伝来したもの」という隣接性によるメトニミーの意味関係が見られる。

一つ注意しなければならないのは、周辺民族との文化交流の時代の違いにより、「西～」で指し示す「伝来元の文化地域」も異な

北西轉西北方向移動、…」
（http://news.chinatimes.com/focus/130501/132011082900704.html）

ることである。例えば、例（９）の〈西瓜〉は原産地がアフリカであるが、中国五代時代に西域との交流から輸入して生じた表現であり、例（10）の〈西天〉、〈西竺〉は唐代のインド仏教思想伝来により〈西天竺〉を表す表現である。また例（11）、（12）は近代になって西方から襲来してきた欧米列強の文化を意味する表現である。それゆえ、「西～」が指す「伝来元の文化地域」を理解するには参照点だけではなく、どの時代に伝来して生じたものか、どのような文脈に現れるのかという通時的な要因も考慮しなければならない[14]。

（９）中国語：西瓜。西紅柿（番茄）。西域。西遊記。

（10）中国語：西天。西土。西竺。西蕃。西遊記。

（11）中国語：西暦。西哲。西醫。西餐。西服。西洋人。西洋音楽。

（12）日本語：西暦。西哲。西側。西洋人。西部劇。西洋音楽。
西洋料理。西洋医学。

3、「陰」を表す「西～」の派生義

古代では太陽の昇る場所にはエネルギー、生命力がもたらされ、太陽の没する場所には暗黒や死寂が漂うといったイメージが強い。そのため、「太陽が昇って昼間になる東－太陽が没して夜になる西」という方向の対立関係を中国の陰陽五行説である「陽（男性）－陰（女性）」に喩え、対立概念の類似性（特性類似）によるメタファーを用いて「東－西」の方向対立関係から「陽－陰」の性別対立関係へと意味拡張された表現がある。

例えば、古代中国の家族の部屋割りは、息子が東側の棟にある部屋〈東廂〉に住むことに対して、娘は西側の棟にある部屋〈西廂〉に住む。同じく古代中国宮殿の〈東宮〉についても、〈東〉が

[14] 「西～」が指す「伝来元の文化地域」が理解されるにあたっては参照点が使われるだけではなく、「百科事典的意味」によっても弁別されると考えられる。語の百科事典的意味とは、その語から想起される知識の総体のことである。（籾山 2010：100）

皇太子のいる場所であることを示しており、男性のイメージである「陽」を表す。反対に〈西宮〉は皇后や女官がいる場所であることを示し、女性のイメージである「陰」を表す。さらに、中国語の四字熟語〈東施效顰〉の〈東施〉は美女である「西施」が眉をひそめたのを真似した醜女であり、〈東～〉ではなく〈西～〉で理想的な女性を表現することは、中国の陰陽五行説が深く関わっていると考えられる。以上の中国語表現では〈東～〉よりも〈西～〉に女性のイメージを感じることができる[15]。

（13）中国語：西廂。西宮。西施。西廂記。

4、「下位」を表す「西～」の派生義

中国語に〈日出而做、日落而息〉という諺があるように、農業生産に依存する古代農業社会では太陽が光をもたらすだけではなく、エネルギー、生命力そのものをもたらすような存在であり、太陽を崇拝する風習が伝えられている。一方、ローマの占いでは鳥を飛ばして、東へ向かえば吉、西へ向かえば凶であるとする風習があった（赤祖父 1986）。このように洋の東西を問わず、太陽の昇る方位である「東」は他の方位に比べて専ら尊重されている。「東尊西卑」とでもいえる思想が古くより存在していたことになるわけである[16]。一方、日本では日本の国名が「日が昇る本の国」の意味を表すほか、「天照大神」が太陽神であり、皇室の祖神として伊勢神宮内宮に祭られていることからみると、「東尊西卑」の思想がないとは言えないが、日本語では「東尊西卑」を意味するような「西～」の用例はあまり見当たらない。その中で、相撲の番付表で右側に記される「東の大関」に対して、例（14）の「西の大関」が「東の大関」より格下とされる例がある。また「西下」は首都から西国に「下る」ことを意味する。

[15] 台湾の風水でも、方位を考える際、「西」が「陰」の方位を意味する。
[16] 中国語では四つの方位を熟語として並べる場合、その配列順序は〈東西南北〉もしくは〈東南西北〉である。いずれも「東」という方位が最初に置かれているのは、「東尊西卑」という概念を反映するものであろう。

（14）日本語：西の大関。西下。

一方、中国の朝廷では文官が東側に、武官が西側に列した。戦乱の時代でない限り、武官は文官よりも地位が低いので、例（15）の〈西班〉は西側に列する武官を指し、「下位」を表す用法である。ただし注意すべきは、中国語の〈西席〉は西の席を指し、「下位」の意味を持つはずであるが、その席は太陽が昇る方向に面しているので、西の位置を間接的に尊重する意味を持つ表現である。また家主を意味する〈東道主〉は、〈西席〉とは逆に、昇る太陽に背を向けて太陽が沈む方向に面した東の席に座ることで、間接的に謙遜の意味を表す特殊な用例である。日本語にも似た表現があるが、本寺の住職が隠退したものを「東堂」というのに対して、他寺の住職の任を隠退して現在本寺に住んでいる長老を「西堂」という。厳密に言うと、これらの表現も太陽を崇め尊ぶ「東尊西卑」の観念に基づいた表現である。

（15）中国語：西班（武官）。

以上の用例は、「東－西」の方向対立関係からさらに意味拡張され、対立概念の類似性（特性類似）によるメタファーを用いて「太陽を崇め尊ぶ東－暗黒や死寂を表し、敬遠される西」という「東尊西卑」の尊卑対立関係に派生されたものである。即ち、「太陽の沈む方位」から「下位を表す方位」用法へと派生された転義であると考えられる。従来の「東尊西卑」の概念で、東に比べて、西が「下位」の意味を表す用法解釈が基本である。

5、「秋、死亡」を表す「西～」の派生義

中国の陰陽五行説により、光輝、温暖、生気をもたらす朝日のイメージは、万物が冬を越して動き始める「春」のイメージによく似ているが、太陽が没すれば、暗黒や死寂をもたらすというイメージが感じられる。そこで、方位による「太陽の昇る東－太陽の没する西」の対比関係を「生－死」に喩える空間認識が生じ、「西」が「死亡」を表す方位になった。

さらに太陽の一日の運行を「春夏秋冬」の四季の移り変わりと

比較して喩えると、太陽の昇る「東」の方角が「春夏秋冬」の「春」に当てはまり、太陽の沈む「西」が「秋」の方位に当てはまる。即ち、中国の陰陽五行説に影響され、対立概念の類似性（特性類似）によるメタファーで、「東南西北」の方位対立関係が「春夏秋冬」の四季対立関係へと意味拡張された。そこで、「西～」が「秋」の意味を表す派生義が生じた。

例えば、中国語の〈西風（例 16)〉も日本語の「西風（例 17)」も単に「西から吹いてくる風」のことを指す場合もあるが、秋の季語として用いられる場合もある。「西収」は秋の収穫を表す。例（18）の〈駕鶴西歸〉、〈接引西方〉、〈上西天〉は中国の「陰陽五行説」の思想に影響され、「死亡」の意味を表す派生義が生じたものである[17]。例（10）の「西天」は唐代のインド仏教伝来により生じた表現であり、「遥かな西方にある仏法の発祥地であり、天竺（古代インド）である」という伝来元の地域「西天竺」を表す。例（18）の〈上西天〉は仏教伝来したあとの「輪廻思想」に中国道教の〈羽化成仙〉の思想を加えて、人間が死んだら、仏教の「西方極楽世界」や道教の〈西王母（西方の瑤池に住んだ王母)〉の所へ行く意味が生じた。即ち、太陽が西方に沈むように、人間は死後も西方へ行く思想を使った「死亡」のメタファーになる。

（16）中国語：西風。古道西風瘦馬、夕陽西下、斷腸人在天涯。

（17）日本語：西風。西収。

（18）中国語：上西天。接引西方。駕鶴西歸。撒手西歸。一命歸西。

四、複合語「東西」、四字熟語「東～西～」の意味拡張

方位語「西」と複合する語彙の類型は、第三節で検討したもの

[17] 日本人学生は「西」に対するイメージや連想語として、「白、秋」を挙げることが多いが、恵（2006）の解釈によれば、陰陽五行説など中国思想の影響が日本文化の中に根底に息づいていることが窺えるという。即ち、日本語の具体的な表現にはあまりないが、秋をイメージするという考えを持っている。

だけではない。本節では複合語「東西」、四字熟語「東～西～」の語例を分析する。

（一）ある物体や場所の「長さ、距離」を表す「東西」の派生義

中国語では、その意味がさらに拡張され、ある物体や場所の横幅を測る場合、〈東西〉である物体の長さを示す派生義が生じる（例19）。日本語にも例（20）のような表現がある。二点間の最短距離は直線であるとよく言われるが、ある物体や場所の長さを測る手順を考えてみると、まずその物体や場所の横幅の両極点を定めなければならない。それからその両極点から作られる直線の距離を物差しなどで測ると、その結果としてその物体や場所の長さが分かる。即ち、ある物体や場所の横幅の両極点を定めることも、ある物体や場所の長さを測る行為の最初の手順に含まれると理解してよいと思われる。

（19）中国語：北投圖書館的建築量體為南北短、東西長。
（綠建築專欄：北投圖書館之一：
http://miketsai.fixy.com.tw/node/1200）

（20）日本語：日ノ本最大の天守閣があった。土台の石垣は南北二十間、東西十八間、高さは六間。その上に二十八間、ほぼ十三階建てのビルディングの高さに相当する。（水澤龍樹著（1998）『慶長残忍伝』より引用。『現代日本語書き言葉均衡コーパス少納言』
http://www.kotonoha.gr.jp/shonagon/search_result）

籾山（2010：86）の説明によれば、日常の経験を一般化することによって身に付けられた、複数の要素が統合された知識の型を「フレーム」という。私たちは、共有している知識に支えられることで、出来事の一部を述べるだけで、出来事の全貌を伝えることができる場合がある。例えば、「トイレ」のフレームで説明すると、私たちは一連の動作の順序である「トイレに入る→排泄する→手を洗う→トイレから出る」という「トイレ」のフレームに関する知識を持っているので、「用便する」と直接言わなくても、「ト

イレに入る」と言うだけで、その排泄行為の全貌を伝えることができる。本節で分析した、「東西」という語を用いてある物体の長さを表現することも、距離を測量するフレームに関する知識を利用した表現だと考えられる[18]。

もし「南－北」を縦の方位軸であると理解するならば、「東－西」はそれに対する横の方位軸となる。「東－西」は横の方位軸に於いて対立した両方位である。それに対して、長さを測るために定めた両極点も横軸の対立関係を持ち、「東－西」両方位の対立関係と類似している。ある物体の長さを示す〈東西〉の派生義は対立概念の類似性（特性類似）によるメタファーで、まず方位対立関係を持った〈東西〉で長さを測る横幅の両極点を喩える。さらに、両極点を定めてから、両極点の間の距離を測る行為を通して、結果としてある物体や場所の長さが分かる。即ち、両極点を喩える〈東西〉はさらに意味拡張され、「両極点を定めるという長さを測る行為－長さを測る行為の結果」という**距離測定行為における「時間の隣接性」**によるメトニミーを用いて、両極点を喩える〈東西〉からある物体の長さを示す用法へと意味拡張されたものである。したがってこれは、複数以上の認知的な比喩を使った派生義であると見られる。

（二）「物体や人間」を表す「東西」の派生義

現代中国語の〈東西〉は「東－西」の方角を表す意味だけでなく、「物体」を意味する派生義もある。この「物体」を表すカテゴリーの意味がいつ頃生じたかは、通時的な研究によらなければ究明できないが、曾石飛（2010）によると、次のような仮説があるとのことである。唐の都·長安では物を売買する市場や商店は〈東市〉、〈西市〉に集められたので、買い物をするためにはこれら〈東

[18] 例えば、英語動詞「see」の用法は「見る」のほかに、「I see what you mean.」のように「理解する」を表す用法がある。もし「見る、観察する」ことをあることを「理解する」認知プロセスの始まりに喩えれば、「理解する」を表す用法は「動作－結果」という時間の隣接性によるメトニミーを用いて意味拡張された派生義である。

市〉、〈西市〉へ行かなければならない。したがって、例（21）〈買東西〉の〈東西〉は「場所－その場所で売っているもの」という「空間の隣接性」によるメトニミーを用いて、「東市、西市という語で示されるようなあらゆる場所」から「東市、西市という語で示されるようなあらゆる場所から集まったもの」へと意味拡張されたものである[19]。例（22）〈到底是甚麼東西〉の〈東西〉はもっと抽象的な「もの」を表現する派生義である。

（21）中国語：買東西。好東西。

（22）中国語：A 酸**到底是甚麼東西**？有人説對肝指數有影響是真的嗎？一般藥局可以買到口服的 A 酸嗎？口服和外用效果有差嗎？【2007-12-02/聯合報/B22 版/快活周報美容 Q&A】

これに対して、日本語の例（23）「東西東西」は、興行物などで客の騒ぎを鎮め、または口上を述べる時に言う表現であり、「物体」ではなく、「人間」のことを指す。即ち、「東西東西」は「東西で示したあらゆる場所」から「東西で示したあらゆる場所に集まったお客さん(ご来場の皆様)」の意味へと拡張されている。従って、これは大体英語の“everybody”、“Attention!”のような表現に似たものであると考えられる[20]。それ故、日本語も中国語も「空間の隣接性」によるメトニミーを用いて、「東西で示したあらゆる場所」から「東西で示したあらゆる場所に集まった物体や人間」へと意味拡張された類似の派生義があると言えるであろう。

（23）日本語：東西東西。

中国語にも〈東西〉で「人間や動物」を表す派生義がある。例

[19] 李欣（1998）「説“東西”道“南北”」によると、古代中国では〈南北〉で人を称した時期があり、それに対して、〈東西〉で品物を指す表現が生じたという。

[20] 東西声（とうざいごえ）は歌舞伎や人形浄瑠璃の序びらき、口上の前などに「東西、東西」と裏から声を掛けること。またその声、開始の合図である。明確な起源は不明だが、江戸時代中期には各種の興行物においてすでに用いられていた。劇場は通常南に向かって建てられているため、「東西」は客席の端から端までの客に対する呼びかけである。口上につきものの「隅から隅まで」とほぼ同義であると考えてよい。（Wikipedia：http://ja.wikipedia.org/wiki/%E6%9D%B1%E8%A5%BF%E5%A3%B0 より引用）

えば、個人的な感情の好悪に基づいて人を軽蔑する例（24）〈他不是個好東西〉（彼はいいやつじゃない）は人をもともと物体を指す〈東西〉で表し、軽蔑した態度で臨む表現であり、また動物を可愛く思っていることを表明する例（25）〈可愛的小東西〉などが特定の会話に現れる。これらの用法も「空間の隣接性」によるメトニミーを用いて、「東西で示したあらゆる場所」から「東西で示したあらゆる場所に集まった物体や人間」へと意味拡張された派生義である。個人の感情の好悪に基づいて「人間」や「動物」を表す場合が多いと見られる。

（24）中国語：梅爾曾誇説自己甩掉阿珍、讓寇特妮覺得**他不是個好東西**。【2008-12-10/聯合報/D4 版/星 blog】

（25）中国語：蘇妮的主人説、她希望小狗能入選吉尼斯世界紀錄。蘇妮現在僅有約 100 克重、醫生認為它很難再有所突破。「它剛出生時看起來那麼小、沒人認為它能活下來。」蘇妮的主人安娜説、「它現在是個**可愛的小東西**、不過在你坐下或走路時都需十分當心。【2012-10-20/中國新聞網：http：//www.chinanews.com/gj/2012/10-20/4263378.shtml】

（三）「あらゆる場所で動作を行う」を表す派生義

方位語〈東〉と〈西〉を使い、四音節の熟語を構成するのは〈東奔西跑〉、〈東張西望〉のように動詞と組み合わせる四字熟語だけではなく、〈東鱗西爪〉、〈忽東忽西〉のように名詞と組み合わせる四字熟語もあるが、四字熟語の意味を理解するためには、四字熟語の中の各意味成分を深く分析しなければならないので、紙幅の制約で、名詞と組み合わせる四字熟語が今後の分析課題とする。

動詞と組み合わせる四字熟語を観察すると、方位語〈東〉と〈西〉を使い、ほかの動作動詞と組み合わせて、構成する四字熟語〈東＋動作 V＋西＋動作 V〉は「あらゆる場所で動作を行う」ことを表す。この場合、〈東～西～〉があらゆる方向を表す〈東西南北〉が略された表現であると考えることができ、「部分－全体」という

メトニミーを用いて、「部分である方向の〈東西〉」で「全体である方向の〈東西南北〉」を喩えることで派生されたと捉えられる。例えば、例（26）の〈東奔西走〉は〈東西南北四處＋奔走〉という意味の組み合わせであり、日本語の「あちこちに走り回る」という表現に似ている。方向の一部分である「あち＋こち」で「あらゆる方向」を喩える表現である。また、中国語では例（27）〈偷東摸西〉などの四字熟語が複合語〈～東～西〉の形で表現されているが、これも「あらゆる場所で動作を行う」ことを表し、複合語〈東～西～〉の表現に類似していると考えられる。

（26）中国語：東奔西跑。東征西討。東張西望。東遊西逛。
東拼西湊。東食西宿。東藏西躲。

（27）中国語：偷東摸西。推東撾西。撩東撾西。說東道西。

（四）「あちこちに散乱された状態」を表す派生義

方位語「東」と「西」を使い、ほかの状態動詞と組み合わせると、その四字熟語〈東＋状態 V＋西＋状態 V〉は「あちこちに散乱した状態」を表す。この場合、〈東～西～〉が（三）の〈東＋動作 V＋西＋動作 V〉の〈東～西～〉と同じように、あらゆる方向を表す〈東西南北〉が略された表現であると考えることができ、「部分－全体」というメトニミーを用いて、「部分である方向の〈東西〉」で「全体である方向の〈東西南北〉」を喩えることで派生されたと捉えられる。

しかし、動作動詞と組み合わせる四字熟語とは違って、状態動詞と組み合わせる四字熟語はある物や状態があちこちにばらばらに点在させられているという、整然としたことではなく、「あちこちに散乱した状態」を表すイメージが感じられる。例えば、中国語の例（28）〈東拉西扯（話に取りとめがない）〉は首尾一貫しておらず、統一されていないことを表し、「散乱、不完全」を表すイメージが生じている。以上の分析により、方位語「東～西～」と状態動詞と組み合わせる四字熟語〈東＋状態 V＋西＋状態 V〉は「あちこちに散乱された状態」へと派生されているものである。

（28）中国語：東拉西扯。東倒西歪。

五、終わりに

本論では、認知的な観点から方位語「西」の多義的用法について共時的に分析した。分析した結果は、以下の三点にまとめることができる。

（１）中国語の〈西〉の語源も日本語の「にし」の語源も「太陽の沈む方位」と深く関わり、日中両言語の「西」に対する方位認識には共通性が見られる。日中両言語の「西」の基本義は「方角の名。日の沈む方向」であり、類似している。また「位置」を表す用法も、後ほど早くから使われたと考え、日中両言語の「西」に対する空間認識には共通性が見られる。

（２）古代中国では、「太陽崇拝」から発展した陰陽五行説との組み合わせから、中国語の〈東－西〉や〈東南西北〉の対立概念によって「陽－陰」、「尊－卑」、「春夏秋冬」などの対立概念を喩え、「陰」、「下位」、「秋、死亡」などの派生義が生じた。これに対し、日本語でも古代中国思想の影響を受け、「西」に対して「陰」、「下位」、「秋、死亡」などのイメージが持たれているが、それを具体的に表す派生義の用法は限られている。

（３）さらに方位語「東」と「西」の組み合わせにより、中国語の〈東西〉は「長さ、距離」、「物体や人間」を表すが、日本語ではこのような用法は限られている。音読みである「西（さい)」からなる複合語「東西（とうざい)」以外には、「長さ、距離」、「物体や人間」を表すような意味拡張は生じていないと思われる。また中国語の四字熟語においては、〈東＋V＋西＋V〉に見られるような「あらゆる場所で動作を行う」、「あちこちに散乱された状態」などの派生義への意味拡張があるが、日本語では中国語の四字熟語から一部を借用しているほかには使用されていない。

これらの観察に基づき、メタファーなどによる意味拡張を用いて基本義と派生義の用法を関連付け、ネットワーク図によってそ

の多義構造を示した。本論では日中言語の語義展開の状況を比較するため、中国語〈西〉の多義ネットワーク図である図４と日本語「西」の多義ネットワーク図である図５のように、それぞれネットワーク図によって、中国語〈西〉と日本語「西」の多義構造を示した。メタファー、メトニミー、シネクドキーによる意味拡張をそれぞれ「M」、「Me」、「Sy」で表示した。また「▲」は用法が限られていることを示す。「M,Me」は複数以上（「M,Me」は先にメタファーを、さらにメトニミーが用いられていることを意味する）の認知的な比喩による意味拡張である。

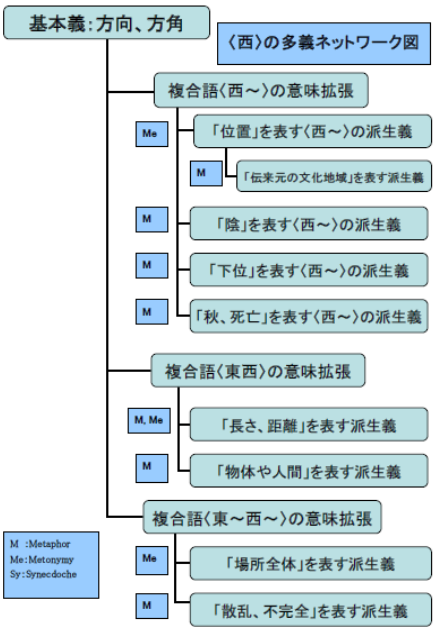


図４　中国語〈西〉の多義ネットワーク図

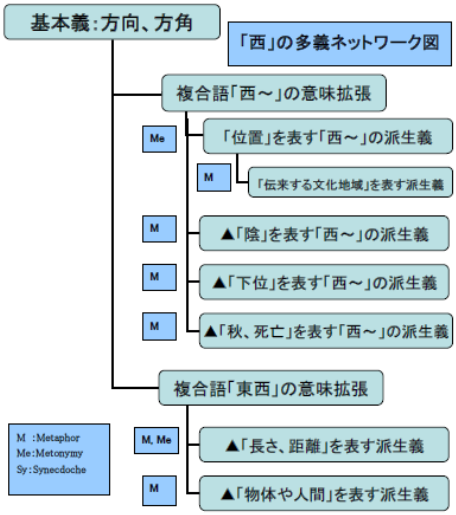


図５　日本語「西」の多義ネットワーク図

参考文献

赤祖父哲二（1986）『英語イメージ辞典』三省堂書店

井上　優他（編）（2009）『辞書を知る』国立国語研究所

王　克升（1994）「日語方位詞和方位指示」『外語學刊 1994 年 01 期』黑龍江大學、pp.34-41

国広哲弥（1994）「認知的多義論－現象素の提唱－」『言語研究 106 号』日本言語学会、pp.22-44

黄　居仁（2009）「從詞彙看認知：詞彙語意學研究的趣味」『語言與認知』台灣大學出版中心、pp.202-262

靳　雅姝（2003）『“東西南北”與方位文化』中國延邊大學碩士論文

瀬戸賢一（編）（2007）『英語多義ネットワーク辞典』東京：小学館

曾　石飛（2010）「“東西”的詞義演變歷程及其原因探索」『現代語文（語言研究版）2010 年第 2 期』山東曲阜師範大學、pp.68-69

竹林　滋他（2007）『ライトハウス英和辞典〈第 5 版〉』研究社

田中茂範他（2006）『Ｅゲイト英和辞典』ベネッセコーポレーショ

ン
谷口一美（2006）『認知言語学』ひつじ書房
陶氏河寧（2006）「現代漢語方位詞“東、西、南、北”的語義分析」『雲南師範大學學報』第 4 卷第 5 期、雲南師範大學、pp.44-48
范　　梅（2005）『關於現代日語中的“方位詞” －兼與漢語方位詞的比較－』中國海洋大學碩士論文
前田富祺（2005）『日本語源大辞典』小学館
水野義明（1978）「「東西南北」－方位語の基準について－」『明治大学教養論集　第 113 巻』明治大学、pp.89-112
皆島　博（2009）「英語の名詞 word の多義構造：認知意味論的分析」『福井大学教育地域科学部紀要 I 第 65 巻』福井大学、pp.9-21
恵　玲子（2006）「日本語と英語における空間語彙、「東・西・南・北」に関する一考察－日・豪の語彙イメージ調査より－」『東京工芸大学芸術学部紀要　第 12 巻』東京工芸大学、pp.29-39
籾山洋介（2002）『認知意味論のしくみ』研究社
籾山洋介·深田智（2003）「第 3 章　意味の拡張」『認知意味論』大修館書店
籾山洋介（2010）『認知言語学入門』研究社
森山新ら（2011）『日本語多義語学習辞典』アルク出版社
李　翰文（2008）『文白對照説文解字字源增補版』中原農民出版社
李　　欣（1998）「説“東西”道“南北”」『咬文嚼字』1998年06期、p.25
李　行健（2004）『現代漢語規範辞典』外語教學與研究出版社
劉旭寶·程放明（2002）「漢日語方位詞的特性與作用分析」『西南民族學院學報·哲學社會科學 2002 年第 12 期』西南民族學院、pp.329-332
鷲見幸美（2010）「語彙習得支援のための認知言語学－意味のネットワークと比喩－」『東呉．名古屋大學共同研討會暨教學工作坊』東呉大學会議論文、pp.33-40

用例採集資料

北原保雄他（2001）『日本国語大辞典第二版』小学館

金田一春彦他（1984）『学研国語大辞典』学習研究社

邊　春光等（2002）『辭海』上海辭書出版社

松村　明他（2006）『大辞林第三版』三省堂

羅　竹風等（1997）『漢語大辭典』漢語大辭典出版社

李　行健（2004）『現代漢語規範辞典』外語教學與研究出版社

現代漢語平衡語料庫：

http：//www.sinica.edu.tw/SinicaCorpus/index.html

読売新聞ヨミダス歴史館記事バンク：

http：//www.yomiuri.co.jp/rekishikan/

現代日本書き言葉均衡コーパス少納言：

http：//www.kotonoha.gr.jp/shonagon/

中時電子報：http：//news.chinatimes.com/

聯合知識庫：http：//udndata.com.erm.lib.mcu.edu.tw:81/library/